

## 次期「国家主席」が確定した 「大陸のプリンス」習近平国家副主席 その特異な「政治的素質」を読み解け！

(2010年10月23日)

尖閣諸島問題をめぐる反日デモ運動が吹き荒れる中国で、さる10月18日に行われた中国共産党第17期中央委員会第5回全体会議（5中全会）は、習近平（习近平・Xi Jinping）国家副主席（57歳）を軍の最高指導機関、中央軍事委員会の副主席に選出することを決めた。軍の人事を握る要職に就いたことで、胡錦濤国家主席の後継者となることが内定したのである。

わずか10年前でさえ、習近平に注目していた人々がどれほどいたのだろうか。彼は、中国共産革命の八大元老の1人である習仲勳の息子、あるいはスター歌手・彭麗媛の夫と記憶されるだけだった。

しかし現在は違う。党中央政治局序列第6位の常務委員と国家副主席を勤め、2012年秋に公式発表される未来の中国権力の、核心としての地位を得たのである。こうした彼のきらびやかな政治的成長とは、逆説的に言えば「最底辺の、最下層の庶民とともに始まった経歴」がその本質にある。

世界中の耳目が「プリンス」と呼ばれる彼に集まってはいる。ところが中国大陸に

おいては、習近平について詳細に紹介している資料を見つけるのは、予想以上に困難だ。中国の代表的なインターネット検索サイト「百度」で彼の名前を検索しても「関連法律・法規と政策に基づき、一部の検索結果が表示されないことがあります」（根据相关法律法规和政策，部分搜索结果未予显示）と示される。しかも検索で閲覧できる資料のほとんどが、彼の公式活動と関連した内容だけなのだ。中国政府がすでに次世代指導者の「イメージ管理統制」に入ったことをうかがわせる。

このように中国では指導者レベルの人物に関する内容は徹底して遮断し管理する。しかし最近では、香港など中華圏において、彼についての高い関心を反映するかのようになり、習近平の伝記がぞくぞくと出刊されている。

2008年1月、香港の呉鳴が「習近平傳」を初めて著し、今年4月には高暁が「これからの中国を率いる習近平伝記」（他將領導中國 習近平傳）を出刊した。

### 習近平を「主席ポスト」に導いたのは何か？

10年前、習近平に注目した人はほとんど

いなかった。当時はみな「中国共産党の革

命元老・習仲勳（しゅう・ちゅうくん/习仲勳/ Xi Zhongxun・1913～2002）の息子）、または「中国の有名民族声楽歌手である彭麗媛（ほう・れいえん/彭麗媛/ Peng Liyuan・48 歳）の夫」と知ってはいても、「習近平」という3文字など眼中にさえなかった。それどころか、わずか4年前の「ニューズウィーク」アジア版（2006年12月号）でさえ、「明日のスター」特集で紹介したのは、李克強（55歳・当時は遼寧省党委書記。現在は中国共産党中央政治局常務委員兼国務院副総理）だけであった。

しかし現在は完全に様変わりした。習近平副主席が「中国の次世代指導者」あるいは「プリンス」と呼ばれるようになったのだ。皇帝が崩御すれば皇太子が自然と「宝位」を受け継ぐように、習近平は時とともに中国の最高指導者である党総書記に選出されることが、党第17期中央委員会第5回全体会議（5中全会）で事実上確定した。

2007年10月の第17次党大会では、同じ「第5世代」の習近平と李克強がともに政治局常務委員に選出された。そのため当時は、誰が後継者になるかはもう少し様子を見なければ分からないと言われていた。

胡錦濤総書記は、最高指導者として登板する10年前の1992年から党の最高指導部である中央政治局常務委員に選出されたのに対し、習近平副主席は2007年にはじめて常務委員に選出された。しかも李克強副総理と一緒にいたため、まだ誰が総書記になるのか分からなかったのだ。

だが常務委員における習近平の序列と現職をみれば、彼が後継者の地位につく条件が、李克強より有利であることは明らかであった。

なにより習近平は現在「中国政治権力の心臓部」と呼ばれる中国共産党中央政治局常務委員会における序列で第6位。中国共産党第18次全国代表大会が開かれる2012年秋の時点でみると、現在の序列第1位にいる胡錦濤（68歳）党総書記から呉邦国・全国人民代表大会常務委員長（69歳・序列第2位）、温家宝・国務院総理（68歳・序列第3位）、賈慶林・中国人民政治協商会全国委員会主席（70歳・序列第4位）、李長春・常務委員（66歳・序列第5位）はみな「年令制限」（選出当時満68才）に抵触するため退かなければならなくなる。また同じ「第5世代指導者」である李克強副総理は序列第7位の常務委員。だが習近平は第6位と先んじている。

習近平はまた、中国共産党の日常業務を管轄する「中央書記処」の第一書記でもある。中央政治局で決められる重要な政策はすべて、中央書記処を通じて執行される。したがってすべての党務は結局のところ、習近平の手を経ることとなる。

さらに習近平は国政の最高責任者である胡錦濤国家主席の次席に位置する国家副主席でもある。中国において国家主席とは、表向きには外交と国防をおもに担当（内政は国務院総理が担当）するポストとされているものの、事実上は国家業務全般を統轄する。副主席とは、このような主席ポストを補佐するだけに、国政全般を広範囲に掌握できる地位でもある。

また習近平は中央党校校長であり、中央港澳工作協調小組（中央香港・マカオ業務調整小組）組長も担当している。「中央党校」とは党中央委員会に直属し、党の高級幹部を養成する機関だ。そのため校長のポスト

は重職であり、現主席である胡錦濤も過去に務めていたことがある。校長とは、文字通り中国共産党の理念と路線を堅持する地位といえる。

中国政府にとって重要な政治問題である「中央港澳工作協調小組」組長を習近平が担当しているという点にも注目すべきだ。政治的に非常に敏感な懸案事項である香港とマカオ問題についても習近平が取り扱っているということは、すなわち中国指導部が、中国共産党の利益に即して適切に処理できる習近平の能力に全幅の信頼を置いていることに他ならないからである。また彼のこうした政治的素質が、昨年「2009年ウイグル騒乱」(ウルムチ虐殺事件)をも惹起したと考えられるが、このことについては後述する。

和合を好み、目立つことを嫌い、かつ慎重で知られる習近平の性格を見ても、彼が政治的な愚を犯す可能性がほとんどないことはこれまでも指摘されてきた。中国の著名なある学者は、習近平こそが2012年に中国の最高指導者とならざるを得ない4つの理由を、以下のように指摘する。

1:「団派」(中国共産主義青年団)を除いた、上海幫(上海閥)や太子党などすべての派閥が習近平を支持。さらには江沢民ら元老グループや党中央委員会委員、候補

委員のほとんども彼を支持している。

2:耿飈(Geng Biao/こうひょう。中央軍事委員会常務委員)秘書だったこと、そして妻の彭麗媛が軍所属の著名な歌手であることから、軍内部でも彼を支持する知人が多い。中国の「次世代指導者」のなかで、こうした軍経歴を有しているのは習近平だけである。

3:他人の話をじっくりと傾聴する性格。これはますます集団指導体制的な性質が強まっている中国指導部で、重要な政治的素質である。

4:性格が大胆であり右往左往しない。先に挙げた理由に加え、こうした習近平の属性や性格も後継者内定に重要なファクターとなったはずである。

中央軍事委員会副主席に選出される「5中全会」に先立ち、習近平の中国国内メディアへの露出は増加した。たとえば彼がさる6月にオーストラリアとニュージーランドを訪問した当時、新華社通信のトップ記事32のうち、9つが習近平の活動を伝える記事であった。いっぽう胡錦濤主席に関する記事は2つ。温家宝総理はたった1つ。「中国国内メディアの過剰な持て囃し」にせよ、これは胡主席が国家副主席だった当時にはまったく考えられない現象だった。

### 中共政界・メディアが絶賛する習近平の「品格」

いっぽう習近平に関する海外メディアの報道は、早くも彼を「悪名高い」ものにしてきているようだ。日本では昨年12月の来日時における天皇陛下との「特例会見」が批判を呼んだことや、またさる2月のメキシ

コ外遊では「腹がいっぱいになって暇になった外国人がわれわれの欠点をあれこれあげつらっている」と発言し、国家指導者らしからぬと批判を浴びたことは記憶に新しい。そこには「ゴリ押し、傲慢」な姿が浮

上するのだが、果たして習近平とはどのような人物なのだろうか。

「平実、低調、謙和、大気」……。2007年10月22日の中国共産党第17期中央委員会第1次全体会議で、習近平上海市党委書記（当時）が中央政治局常務委員として選出された際、香港の「大公報」紙は10月23日付けの記事で、彼をこのように紹介した。

「平実」とは素朴である、という意。「低調」とは十分な才能や能力があるにもかかわらずこれを誇示せず、謙虚であるという意。中国では人間として行動するときには「低調」、仕事をするときには「高調」であることが模範とされる。仕事は積極的に、自慢や自己評価は消極的にせよ、という意である。「謙和」は謙虚で温和な性格を指す言葉であり、「大気」とはおおらかで堂々としているという意味である。

いささか過大な賞賛というべきだろう。だが習近平の人となりについて、思想が柔軟で視野が広く、報道メディアとうまく交流して情報時代と時代精神によく適応し、なおかつ「韜光養晦」（能力を隠し謙虚なこと）な人物、という評にブレは見られない。習近平の政治的未來が明るいと言われるのも、彼のこのような性格が功を奏している。

現在のように注目される以前の習近平を取り上げたメディアは少ない。異例なのは彼が福建省代理省長時代（1999～2002年）に「中華子女学院学報」のインタビューに応じ「私は個人的な宣伝を望んでいないので、これまでインタビューを100回以上断った」と前置きし、「我々リーダーは当然の職務を遂行しているだけであって、何の宣伝対象でもない」と述べている。

30代を迎えた当時の習近平は河北省正定県党委書記（1983年11月～1985年6月）であった。のちの2007年、この年の5月に予定されていた第17次党大会を控えて、河北省の「石家荘日報」は一面トップで「正定での習近平」を取り上げ、彼の若き時代の仕事ぶりを賞賛する記事を掲載した。彼が上海市党委書記に選出する前、つまり浙江省党委書記時代のことである。石家荘日報を一瞥した習近平は河北省政府のトップに電話し、「どうしてこのような記事を出させたのだ！」と激怒したという。習近平は普段は温和だが、高級幹部子弟の出身であることに触れられると血相を変えて怒るといのは、中共政界では有名な話である。

習近平はまた、才能や業績よりチームワークをより重視する。彼は常に下級職員たちに「チームワークそのものは目標ではない。だがチームワークが良ければ仕事は常に比較的うまくいく。だが団結がうまくいかなければ、仕事をいつも首尾良くこなすのは難しい」と強調する。

こうした彼の人格形成に大きな役割を果たしたのが父親の影響だ。父の習仲勳は「自分がやりたくないことを他人に強要するな」（「己所不欲、勿施于人」）という孔子の言葉を、子どもたちに口酸っぱく繰り返して教育した。

これは同じ「太子党」として現在、重慶市委書記である薄熙来（61歳）と大きく比較される。薄熙来は過度に自己中心的であり、部下には怒りっぽく、また功名心が強いと言われる。昨年6月からはじまった重慶の犯罪組織一斉検挙キャンペーン「打黒」の成果を強調する薄熙来に対し「個人的な人気取りパフォーマンス」などの批判も浴

びせられている。また大連市長時代（1993年～2000年）の彼は、曹伯純（中国共産党遼寧省委員会副書記・大連市党委員会書記）と水と油のように相性が悪く、また遼寧省長時代（2001年～2004年）には聞世震・遼寧省委員会書記と不仲であった。

もちろん習近平に対する上記のような称賛は、彼が次世代の最高指導者となることを前提としていっそう過大にふくらまされ、メディアから持て囃されているという側面

### もっとも太子党らしくない「ザ・太子党」

「太子党」とは党の高級幹部や財界要人らの子女を意味する言葉であり、約4000人を数えることができると言われている。太子党は上海幫や団派とともに中国政界の3大派閥の1つである。中国には「太子党」と名乗る政党や政治組織は存在せず、自らを太子党のメンバーと名乗る者もない。便宜上の呼称ではあるものの、太子党と言われる人々は学校や職場、または血縁を通して濃厚な関係を結びつつ、党・政・軍の要職に布陣している。そのため庶民の、非難の対象になるのが常でもある。

習近平は「太子党中の太子党」だ。中国共産党中央宣伝部部長と政務院秘書長、國務院副総理、全国人民代表大会副委員長を歴任した習仲勳を父にもつからである。習仲勳は周恩来の右腕であり、また「中国改革開放のグランド・デザイナー」鄧小平の親しい友人でもあった。

だが習近平が、人生のはじめから「高官の子弟」を意味する太子党としての、親の七光り恩恵を受けたわけではない。「反党小説劉志丹事件」が、習近平の人生のスター

もあるだろう。だが実際の習近平を身近に見守った人々は、みな一様に彼に対し好印象を抱いているというのは事実のようだ。現在の「プリンス」ポストに習近平を就かせたのも、人々に強い好印象をいだかせる彼の姿勢が功を奏しているという。礼儀正しいながらも誠実で謙虚であり、堂々とした彼の品格は次世代指導者のなかでも突出しているというのだ。

トを、根こそぎひっくり返したからである。

中国建国100大英雄の1人に数えられた劉志丹（刘志丹・1903-1936）は、「山間革命の根拠地」である陝北革命根拠地の創建者としての活躍。山西省に入ったところで同地を支配していた国民党の閻錫山軍に敗北し、33歳の若さで戦死した。問題はこの劉志丹の生涯を描写した小説「劉志丹」中にある、クーデター未遂で失敗・自殺した高崗（Gao Gang/高崗）に関する記述が、「高崗の名誉を回復し党を攻撃するもの」と、毛沢東（1893～1976）の逆鱗に触れたからである。

劉志丹とともに苦勞して陝北革命根拠地を作った習仲勳は、たった1日で毛沢東により反革命分子のレッテルを貼られ、副総理職から解任された。その後の習仲勳を待ち受けていたのは、何と16年間におよぶ拘禁・監護生活であった。

このとき習近平はわずか9歳。父親が突如として粛清された後、党高級幹部の子女が通う「北京八一学校」からも追放され、河南省の農村へ下放された。さらに1966年

の文化大革命の際には陝西省延川県の人民公社に送られた。

だがこのような苦難こそが、習近平の人生を成功させる大きな転換点として作用した、と彼自身は述べている。下放されたばかりの幼少期には農民と身体が接触することも、農民が近づいてくることさえ怖がった彼は、農村生活に耐えられず、3ヶ月後に北京にこっそり戻っては摘発され、拘禁されたこともある。ところが再び農村に戻った彼がやがて成長すると、180センチの体格を生かし「100斤の小麦袋2つを天秤棒で担ぎ、十数キロの山道を難なく運ぶ」という猛烈な働きぶりを示した。そのおかげで地元農民らとも親しくなり、71年（18歳）には共青团への加入を認められ、陝西省延川県文安駅公社梁家河大隊党支部書記にまで昇進した。7年間の下方生活により民衆の人生を徹底的に体得したという彼は「私の成長は陝北（陝西省北部）から始まったと言わなければならない」と回顧したこともある。

こうした経験のためか、彼は他の太子党とはまったく異なる庶民的情緒を有しているという。習近平が他の太子党と比較されるのを嫌うのもこのためだ。

1976年は中国にとって青天の霹靂ともいえるべき年であった。新年を迎えたばかりの1月8日「中国人民の永遠の総理」と呼ばれた周恩来（1898～1976）が死亡。さらに同年7月28日中国10大元帥のトップであった朱徳（1886～1976）が亡くなった。さらに2ヶ月後の9月9日には毛沢東が逝去。中国社会が変わりはじめ、毛沢東の死から約1ヶ月後の10月6日には、文革を主導し隠れ蓑にして極端な政策を実行した江青、

張春橋、姚文元、王洪文ら「四人組」（四人帮）が逮捕・除去された。

習仲勳が政界に復帰したのは1978年2月（65歳）。2ヶ月後の4月3日、習仲勳は広東省党委第2書記として復活した。また1978年8月の党第11期中央委員会第3回全体会議（第11期3中全会）以後、彼を失脚させ16年間の獄中生活を強いた「反党小説劉志丹事件」に対する党の見解が是正。反党小説ではなく、無産階級革命家を賛美し革命闘争史を描写した小説、という再評価が下された。

あまり知られていない事実だが、習仲勳は経済特区構想をはじめて提案した人物だ。広東省書記兼省長に在任した1979年はじめ、中国から香港への密航者が後を絶たないことに衝撃を受けた習仲勳は、経済特区設置の必要性を強調。鄧小平がこれを受け入れ、深圳・珠海など4カ所に特区を設置したのである。鄧小平の開放路線が成功を収めるようになったのは、習仲勳をはじめて提案した特区構想が広東省で成功したためなのだ。そのため習仲勳は中国で「改革の先駆者」と賞賛され、習近平の故郷の人々は習仲勳を大いに自慢する。

そのためか、楊尚昆と江沢民の執権期間、習近平は重用されつづけた。清華大学化工系で基本有機合成を専攻し卒業したのち、習近平は国務院弁公庁で耿飈副総理の秘書に抜擢された。耿飈は当時、党中央政治局委員であり、国務院副総理と中央軍事委員会秘書長を兼ねていた。この人事は父・習仲勳のおかげといえよう。

（なお、習近平が福建省長に在任中の2000年、清華大学で「法学博士号を取得した」という彼の経歴には疑念が提示されて

いる。博士論文が法律とは無関係であることや、指導教授が法律の専門家ではないことが問題視されている)

1982年、29歳の習近平は河北省正定県党委副書記に任命。1985年、32歳のときには福建省廈門市の副市長となった。父・習仲勳の提案で設置された経済特区のひとつ、廈門市に特別配置されたわけである。

### 福建省での失敗と、浙江省での成功

「河北で訓練し福建から離陸、浙江で翼を広げ上海へ飛ぶ」……。習近平の政治経歴についてよく言われる言葉だ。

1982年3月、はじめて地方である河北省正定県へ向かった習近平は、1985年6月に福建省へ移った後、2002年10月までの17年あまりを福建省で過ごした。その後、浙江省と上海市党委書記を歴任した。

だが河北省正定県党委副書記から福建省長までの、20年にわたる地方勤務期間中、習近平の政治的業績はお世辞にも芳しいとはいえなかった。福建省では福州市長として6年も在職したにもかかわらず、政治的功績と呼ぶに値するものを何も残すことはなかった。

彼が意欲的に推進した長楽国際空港建設と三坊七巷開発計画はすべて失敗した。巨大な長楽国際空港は開港後4年半後に、11億人民元(約134億円)の赤字を出した。また香港の著名事業家・李嘉誠が協力した三坊七巷政策は、住民の反発と膨大な事業費のために遅々と進まず、結局は撤回されてしまった。

こうした習近平の「失政」のため、福建省はかえって周辺の上海や浙江、広東省に

ひきつづき沿岸地域である福建省の省長と浙江省長(代理省長)を歴任。1997年の党第15回全国代表大会では、薄熙来をふくむ第5世代の太子党らが中央委員と中央候補委員選挙で大量脱落したものの、習近平は鄧小平の息子・鄧樸方とともに中央委員会へ進むことに成功した。

比べて経済成長が大きく遅れてしまった。このため福建省の人々の間では「(経済特区である)深圳で株式に投資し、(中国の経済的中心である)上海で金勘定しているというのに、福建では社会主義思想教育をしている」と皮肉されたほどだった。

そのうえ、習近平が福建省長を勤めていた2000年6月、イギリスのドーバーにてオランダからフェリーに載ってやってきたトラックの積荷が検査されたところ、何と58名の密航中国人が冷凍庫で窒息死していた、という事件までが発生した。58名は全員が福建省出身であった。

福建省時代の習近平で唯一評価すべきことは、せいぜい彼が省内のすみずみにまで足を運び、庶民の苦情を聞き、庶民とともに呼吸したことだけだった。ところが、こうした習近平の姿勢が、のちに彼の大きな政治的成果と評価されたのである。2000年8月の「人民日報」は「平常心で住民業務を処理」というタイトルで習近平のこうした姿勢を報道。庶民派省長としてのイメージ構築に大いに功を奏した。

しかし習近平の「真の政治的業績」は2002年、浙江省党委書記になってから大きく変

化した。彼は浙江省党委書記時代、持ち前のリベラルさを大いに発揮、1人あたりの総生産を全国最高である3000米ドルまで引き上げ、5年後には浙江省を「中国で民間企業が最も発展した省」に成長させた、との評価を得たのである。

### 成果よりチームワークを重視

中国政府高官のほとんどは、自らの任期のうちに「政治的業績」と呼ぶに値する成果を上げようとする。また前任者との差別化を図るため、できるだけ前任者の成果を批判し、新たな路線と政策を展開しようとする。

だが習近平は正反対であった。彼は可能なかぎり、前任者の政策路線や推進課題を廃棄しなかったのだ。また新しい事案を推進しても「必ず自らの任期中に成果を出す」という私欲を働かせなかった。習近平が福建省時代、あまり政治的業績をあげられなかったのも、彼のこのような業務への姿勢と関連があると言われる。

中国でよく使われることわざに「新官上任三把火」（新たな官吏が赴任すると、張り切って新しいことを3つ始める）がある。そこには「新しいことをあれこれ始めても、続かない……」という皮肉も込められている。もともと羅貫中が著した中国4大名著中のひとつ「三国志演義」に出てくるこの言葉は、諸葛亮が劉備の軍師になった後、3回も火攻により曹操の軍隊を全滅させた、という故事による。だがいまでは、新しく赴任した官吏が張り切るあまり拙速に政治的功績を積もうとし、結局は大きな失敗を

「浙江省の活力の源は改革にある。浙江省はすでに中小企業家の社会、起業家の社会となった。中間層が厚い、亀のような形のグラフで表される社会に変わった」（2006年3月・中国中央電視台報道にて）

することになる、という警句として使われている。

習近平の姿勢は、この逆だった。福建省の代理省長に任命された際、彼が強調したのは業務の連続性とチームワークの2つであった。彼は前任省長が固めた基礎の上で仕事をするを明言し「業務とはリレーのようなもの。バトンをちゃんと受け渡し、しっかり持って走らなければならない」と述べている。

また習近平は指導部間の不協和音を警戒し「指導者は政務に邁進しながらも、人間関係への配慮と処理にエネルギーの70%を使わなければならない」と強調した。こうした方針のため、習近平は政治的業績こそ振るわなかったものの、どこへ行こうとも同じ指導部内で内紛が起きないように努めた。政定、厦門、寧波、福州のどこでも、習近平とともに働きながら、彼と諍いを起こした者はいなかった、という。

習近平は好きな歴史的人物として、秦始皇や漢武帝、唐太宗のような不世出の英雄ではなく、劉邦や劉秀、劉備のような、優れた知力や才能を備えずとも団結上手な人物をより尊敬する、と述べている。



## 知られざる習近平の家族構成

### 彭麗媛は「再婚相手」、実姉は中国不動産業界の大物

習近平は1987年9月、34歳の年齢で9歳年下の彭麗媛と再婚した。あまり知られていないことだが、彼の最初の夫人は前駐英国大使だった柯華（95歳）の娘だ。柯華は中華民国時代に北京市に設置された燕京大学を卒業後、抗日戦争の吹き荒れるなか、山西省の八路軍に志願入隊。以後は西安市宣伝部長、副書記をへて習近平の父である習仲勳の直属の部下となった。

習近平がなぜ柯華の娘と離婚したのかは分からないし、もはや調べようもない。前夫人が単身でイギリス留学したため夫婦仲が壊れたという説もあれば、習近平が若くて美しい彭麗媛と出会ったためだ、という説もあるが、そのどれも確認することができない。なにしろ中国語圏のインターネットサイトを、目を皿のようにして検索しても、習近平の最初の夫人に関しては、名前さえ知ることができないのだ。

習近平の兄弟姉妹は7～8人と推定される。このうち3～4人は習仲勳の前妻との子であり、つまり腹違いの兄と姉である。兄の習正寧（習仲勳と前妻との長男）は父親と似た風貌を持ち人柄も寛容だったが1998年、父親に先立って亡くなった。姉の習和平（習仲勳と前妻との長女）は文革の渦中で死亡、次女の習乾平は一般人として生活している。習近平は彼らと、たとえ母親は違えども大変仲良く育ったという。

習近平の母は齊心。彼は父・習仲勳と、後妻である母・齊心との間の第3子（長男）として北京にて出生した。第1子（長女）の齊橋橋（齊桥桥・61歳）は現在、夫の鄧

家貴とともに「北京中民信房地產開發有限公司」という不動産会社の理事長として、北京で不動産開発につとめている。齊橋橋は北京に超豪華マンションを建設・分譲し、莫大な資産を保有していることが知られている<sup>1</sup>。

外交学院を卒業しフランス語に堪能な2番目の姉、齊安安（齐安安）は、北京に住んでいるという説が有力だが、オーストラリアへ移住したという情報もある。

彼女たちも無論、もともと「習」姓を名乗っていた。だが高校入学を機に母親の姓である「齊」に変えた。その理由とは彼女たちが、党高級幹部の子女が通う北京市の模範高校「北京101中学」に入ることができない成績ではなかったため、当時副総理だった習仲勳が彼女たちを一般の高校に通わせつつも、周囲の人々から誰が父親なのかを調べることをできないように、姓を変えさせたのだという。

習近平の2歳年下の弟、習遠平（习远平）は学生時代が文革期と重なったため十分な教育を受けられず、そのため旋盤工として働きながら人民解放軍に入隊したのだが、軍隊生活には適応できなかった。除隊後、彼はある未詳の犯罪事件に関わり逮捕されたこともあるが、現在は国際省エネルギー環境保護協会（国际节能环保协会 / International Energy Conseration Environmental Protection Association - IEEPA）の会長ポストに収まった、といわれている。

<sup>1</sup> <http://surl.silibank.net/?WTSAG>

国家主席の地位が内定した習近平にとって、今後は不動産業界の大物である1番上の姉と、品行方正とは言い難いと思われる弟をどのように管理するかは、彼にとってひとつの重要な課題といえるだろう。

だが習近平がこれまで示してきたクリーンで庶民的な姿勢があればこそ、彼が足下をすくわれる可能性は低い、というのが中国での大方の見解だ。1994年4月、福建省

## 日本との関係は？

### 「対日強硬路線への転換は考えづらい」

2009年9月に開かれた「4中全会」（第17期党中央委員会第4次全体会議）では、大方の予想とは裏腹に、習近平は党中央軍事委員会副主席に再選されなかった。

一部の中国ウォッチャーはこのとき「次世代指導者間に異常気流か？」との疑念を呈したが、香港の「鏡報」誌（2009年12月号）は当時の裏事情を報じ「習近平氏は4中全会前に中央政治局常務委と胡錦濤氏に書簡を送り、中央での活動期間が短いため新たな工作担当能力が未熟であること、そして軍の現状の分業体制を簡単に変更することは良くない、という理由を挙げ、自分を中央軍事委副主席に指名しないよう要請した」という。彼の人品に関する過大とも思える中国マスコミの賛辞をいささか割り引いて考えても、私欲を働かせず、また「業務の連続性」を重視する習近平らしいエピソードと言えるだろう。

「習近平の未来が明るくならないはずがない。彼の名前に含まれる3つの字にその秘密がある。『習』とは上の世代の長所に学ぶことに優れ、『近』とは中央指導部と地方

では中華人民共和国建国以来、最大の密輸事件（遠華密輸事件）が発生した。福建省の高級幹部はほぼ一網打尽にされたが、福建省党委常務委員のなかで唯一生き残ったのは習近平だった。この事件を調べた中国海関総署（中国海関）監察班によれば、頼昌星・元遠華グループ会長が密輸した金額は530億人民元（約6470億円）、脱税額だけでも300億人民元に達した。

人民との心理的距離を狭めることに優れ、『平』とは幹部としての態度が平穏で素朴、穏和で堂々としていることだ……。中共政界で広く知られる言葉だ。

権力の源泉である中国人民解放軍からの絶大な支持。また江沢民前国家主席をはじめとする元老グループからも強い支持を得、共青团系列を除く現指導部からの信頼も篤く、一般人民からの好感度も非常に高い習近平。実質的な集団指導体制へと移行している中国にあって、カリスマ的指導者よりチームワークを重視し、多様な価値観と意見を上手に取りまとめ、調和させることができる習近平のリベラルさは、時代が要求する指導者像そのものである、というのが中共政界での評判だ。

わが国にとって習近平といえ、記憶に新しいのが2009年12月14日～16日、日本政府の招待で日本を公式訪問した際の、天皇陛下との特例会見だ。本紙は以前、「中曽根康弘元首相が希望された」という前原国交大臣の説明とあわせて、「天皇自らが習近平副主席との会見を望まれた」という情

報が漏れ伝わっていることを紹介したことがある。真相が何であったのかは不明だが、中国外交部は「日本国内の問題だが、日本政府に感謝する」と謝意を表明。また天皇陛下も習近平との会見を喜ばれたのは事実のようだ。

2008年3月26日、習近平が北京の人民大会堂で、第2回日中ジャーナリスト交流会議の日本側記者団（田原総一郎座長）と会見した席で、日本の印象を尋ねられた彼は相好を崩し「わたしは日本が大好きなんですよ」、「まだ日本には行っていない場所がたくさんあるのでぜひとも行きたい」と述べたことを日本経済新聞が27日付けで報じている。個人的印象、というレベルでは、彼は日本に好感を抱いていることがわかる。

いっぽう2007年4月、評論家の宮崎正弘は自身のメールマガジン「宮崎正弘の国際ニュース・早読み」にて、「上海進出日本企業に広がる一種の絶望感は習近平・新書記が原因」と題し、浙江省党委書記時代の習近平について「じつは事情通によれば、浙江省書記時代の習近平は、『日本企業いじめ』が顕著で、多くの日本企業がその執拗な嫌がらせにネをあげていた。だから日本企業数千社はこの新人事（習近平の上海市党委書記就任）を一種絶望観で見ているという」との情報を紹介。また同メールマガジン香港の「開放」誌の記事の一部、「習近平は1990年から2000年まで、福建省のボスとして十年の赴任中に麻薬汚染、汚職、偽物貿易、博打場経営、売春黙認など権力の濫用で巨額の賄賂を受けていた云々の噂が絶えなかった」を紹介している。

この「開放」誌の噂とは、むしろ汚職に

まみれた福建省人民政府そのものの実態であり、先にあげた「遠華密輸事件」で逮捕されなかった唯一の高級幹部としての、習近平の品格が輪郭をともなって浮かび上がる。だが「日本企業いじめが顕著」というのが事実であろうか。事実ならば、習近平時代の日中関係はどうなるだろうか。中国マスコミが賛美してやまない、持ち前の品行方正さ、クリーンさを日中関係でも発揮してくれるだろうか。2010年10月19日、BBC中国語サイトは首相官邸消息筋を引用し「対日強硬路線への転換は考えづらい」との分析を紹介している。

習近平はまた、昨年7月に発生した「2009年ウイグル騒乱」（ウルムチ虐殺事件）の責任者とも言われている。日本ウイグル協会はウェブサイト上で「習近平国家副主席は、対策チーム内部に慎重論も起こる中、『どの民族が起こそうが、暴力事件には徹底して対処する』と発言、徹底した武力鎮圧を主張しました。その結果、当時の王楽泉新疆ウイグル自治区書記を始め、地元の武装警察の暴走を許し、多くの人命が失われることになったのです」と強く抗議している。

シンガポールの李光耀・現顧問相（元首相）は習近平を「知覚あふれる人物だ。強い感情抑制力を備える。個人の不平が判断に影響を与える人物ではない」と評する。指導者としての政治的素質や統治力と、たとえば人権意識とはまったく別物。同一線上で語ることも、和合することもできないどころか、時として強く拮抗するのは自明だ。

習近平の決断により数千人のウイグル人虐殺を招いたのが事実であれば「人道に対する罪」が追及されるべきだ。だが日本国

内の、特にネットで喧伝される彼の「虐殺者」イメージや、彼が福建省長時代に目の当たりにしたであろう福建省人民政府内の汚職や幹部の権力濫用、あるいは地方幹部時代に何らの業績をも残さなかったことに言及し、尖閣諸島問題で拡大した反中感情を高ぶらせつつ、バイアスのかかった眼で彼を見ることは、日中関係のプラスには決してならないだろう。中国メディアは習近平を過剰に持ち上げ、いっぽう海外メディアは批判的に報じる。中共政界に独特なパワーバランスを想定し、習近平「次期国家主席」の登場の背景をあれこれ推測する向きも多い。だが、われわれが彼について知っていることは、実はあまり多くない。

彼の「政治的素質」がどのような時代を、どのような日中関係を構築するのか。西欧式民主主義の「コスト」を忌避し、法治中心の政治改革の可能性が言われる習近平時代を読み取り対処する作業は、まだ始まったばかりだ。(敬称略) ■